



ユビキタス社会の公共空間

——誰でも使えるコンピューターの実現

中央大学法学部4年

はた けんいちろう 湯もと みつひろ
秦 健一郎さん 湯本 充洋さん

第1章 「ユニバーサルアクセス」の実現

いつでも・どこでも・誰とでも繋げるといふ、理想が現実の世界へと実現したユビキタス時代。飛行機のようにどこまでも「飛んでいける」感覚は、まさに瞬間移動のようだ。ユビキタスネット時代では、PCという持ち運びに不便な「空港」の必要が無くなる時代が近づいてきている。

確かにITという先端テクノロジーは、人間の力を最大限にまで高めてくれるだろう、しかし、それは増幅装置にしかなり得ず、「無」から「有」を創り出すことは出来ないのだ。根本は人間力にあり、それ無しには始まらないことは使うヒト自身が認識しておかなければならない。これはいつでも変わらない本質だ。あくまでツール（道具）であり、その点においてはアナログの象徴である鉛筆と全く同じなのだ。この点を十分に認識していくことが、何よりユビキタスネット時代に大切であるはずだ。

一方でITの発展による“壁”とは何なのであろうか。昨今、格差社会に象徴されるように、持つ者と持たざる者の著しい差が指摘されている。「閉じたデザイン」のまさに象徴と言ってもよい箱型というデザインで、パーソナルコンピューター(PC)は創り出された。この閉じた箱型のデザインは、まだまだ一部の人間にしか開かれていないのではないだろうか。ここで指摘したいことは、人間に対してPCを始めとするコンピューターが使いつづらぬものではないかということだ。

今は情報の均質化が叫ばれ、ITの利便性は著しく向上しているという。しかしながら、結局のところ受信した情報を取捨選択する能力が一定以上無ければ、利便性を受けることは難しいだろう。デジタルデバイドは今日、ITと人間の関係における大きな問題点である。全

ての要因は、私が思うに『普通の人のために作られたコンピューター』が未だ姿を現してはいないからだ。ついつい目の前だけを見てしまうが、足下を見てみるとユビキタス社会においてITインフラが整備され始めてきた今、もう一度見直すべきはハードウェアではないかと考える。そこで私はITのベースとなるコンピューターの完全な「ユニバーサルアクセス」を提案したい。

これはその名の通り、全ての人アクセス出来るコンピューターのインターフェースを意味する。点字式キーボードやタッチペン入力 of 更なる精度改善、音声認識システムの向上といったハードウェア的な側面から、自動読み上げシステム・ユニバーサルフォント及び自動拡大縮小機能、画面識別コントラストを全てのコンピューターに標準搭載をする等が現在でも進められているが、こういったこと更に推し進めていき、将来的にはマニュアル不要な直感操作型コンピューターを目指していくべきだと考える。

では、ユビキタス時代にユニバーサルアクセスがもたらすものは、いったい何なのであろうか。複雑な「箱」は、いまやその仕組みを完全に理解できている人間は世界でも多くはないであろう。例えばパソコンの心臓はCPUであると言われるが、おそらく仕組みを理解出来る人はほとんどいない。今のパソコンはそんなことを理解していなくても使用することは出来るし、理解して受けるメリットはほとんどない。しかしながら、同時に言えることは、使用していながらもパソコンが持つ能力を完全に生かしている人々も、実はそれ程多くないのではないかということである。まだPCに「ツールとしての不完全さ」があることこそが、人間の自立を拒む壁なのだ。もっとシンプルに、鉛筆のような使い心地に。

もちろん、普通の人とは何も五体満足な人間を指すわけではない。障がい者や高齢者もその中に含んでい

る。これによって、今までITの恩恵を受けることが難しかった人達にも、日本だけではなく世界へとその個性を生かして活躍できるフィールドが広がっていくことは間違いない。老若男女、障がい者全ての人達に使いやすい。そんなひとに優しいコンピューターが一番の解決になるのではないかと考える。

これからの日本社会の少子高齢化社会という壁を乗り越えるために、「全ての人達」が大きく個性を發揮していかなければならないだろう。全ての人達が少しでも自分の「ビジョン」に近付いていくことが出来る、そんなITの世界を望んでいる。そして、未来創造とは「誰かに喜んで買ってもらえるモノ」であって初めて意味があることだと思う。お金儲けだけしか考えないことは問題ではあるが、自分勝手な理想だけでは未来を切り開いていくテクノロジーは生まれないことも強調しておきたい。

第2章 情報発信の環境づくり

パソコンや携帯電話等の情報端末の普及により、ユビキタスという言葉がにわかに現実味を帯びてきた。今や欲しい情報を、いつでもどこでも簡単に手に入れることができる。ところが、ユビキタスという言葉は便利さばかりが先走りしていて、それに対するリスクをあまり考えていないようにも思える。ユビキタスは単に欲しい情報が転がり込んでくるツールではないのだ。

欲しい情報が欲しいときに手に入る、それは裏を返せば、常に自分の情報を発信しているということになる。つまり、利用者が今どこにいて、どんな情報を求めているかが常に把握されているのである。個人情報と引き換えに、私たちは便利で有益で必要な情報を得ることができるのである。ユビキタスネット時代は情報を常に発信している時代であり、いくら個人情報の保護を叫んでもそれを止めることはできない。

ユビキタスネット時代のITと人間との関係を考える

上で欠かせないのは、情報のコントロールである。今までのセキュリティという概念ではもはや足りなくなってきた。セキュリティは情報を「壁」により囲い込み、自分の都合の良い情報だけを流すものである。ところがユビキタスは自分に関わるあらゆる情報を求められる。それに対して拒否をしていると利便性は損なわれてしまう。ユビキタスネット時代が訪れると、従来の「囲い込みのセキュリティ」は意味を成さなくなってしまうのである。

ここではもう一步踏み出して、流れた情報をいかにコントロールするかを考えなければならない。いうならば、情報一つひとつに首輪と紐をつけ、その紐をたぐって好きなところまで情報を行かせる、というイメージである。それぞれ個人が発信したい情報を発信したい場所・時間を決めて出すことができる。逆に、引っ込めたいときはいつでも情報を消すことができる。「囲い込みのセキュリティ」から「情報のコントロール」へと進化、もしくは再構築することが求められる。

しかしながら、全ての情報を一つひとつコントロールすることはできない。一個人に関わる情報の数が膨大すぎるからである。名前や住所から始まり、服のサイズやDNAの配列、さらには今どこにいて何がしたいかに至るまで、全てが一個人に関わるコントロールすべき情報なのだ。この膨大な量の情報を理解し、利用するには、主に二つの意味での環境作りが欠かせない。

第一に、実際に情報をやりとりするインフラという意味での環境である。現在の環境では一度出た情報は一瞬のうちに世界中に広がり、それを一個人の意思で引っ込めることは不可能に等しい。近年の技術の進歩により、情報の分類・検索は高度なものになってきている。これはつまり、情報に首輪(タグ)をつけ、コントロールすることへの技術的ハードルが低くなっているといえる。

第二に、それを使うためのルールやマナー、法律といった意味での環境である。情報が漏れてしまった人を救済するため、また、悪意をもって情報を狙う人への対策として、法整備は不可欠である。しかも、それはかな

り柔軟に運用できるものでなければならない。IT犯罪は技術と共に常に進歩していて、しかも社会に深刻な被害を与えかねないからである。また、情報の出し入れを個人の裁量で容易にできるようにするのだから、知る権利を妨げる可能性もある。そのため、明確なルール作りが必要なのである。

これらの環境の整備に加えて、情報のコントロールに必要不可欠なのは「人の理解」である。ただ単に囲い込むのとは違い、情報に対する理解がなければコントロールすることはできない。どの情報をどこまで出すかを決定するのは、その情報を持つ個人だからである。すなわち、個人が情報を発信することのメリット・デメリットを理解し、適切に判断できるようになる必要がある。ブログの台頭は、個人を新聞記者にする可能性をつくり、消費者のより広い嗜好を満たしたと同時に、コンテンツの信憑性に疑問を投げかけた。この現象により消費者は情報を鵜呑みにするのではなく、選択して考えるようになってきている。情報発信への理解を養う環境が整ってきているといえよう。

ユビキタスは確かに便利ではあるが、四六時中情報にアクセス可能になるのだから当然リスクは高まる。従って、何よりも、こうしたリスクへの理解を深めることが欠かせない。そして、リスク管理を可能にするための、個人が自由に情報を発信できる環境の構築が必要である。個人の情報発信への理解と情報をコントロールする環境、この二つは切っても切り離せない関係にあると考える。これらが揃って初めて、人は個性を生かして新たな価値を作り出すことができるのではないだろうか。

第3章

ユビキタス社会の公共空間

「ユニバーサルアクセス」と「情報のコントロール」という二つの課題とその解決提案からITと人間の関わりについて論じてきたが、二つの課題の共通点はユビキ

タス社会を日本全体で作り上げる「公共空間」であると捉えていることである。そこで第三章では、課題を解決した後のユビキタス社会を公共という観点から少し見てみたい。

誰でも使えるコンピューターの実現は、まさにITとユビキタスネットをより「公共」性の高いものへと近づけることになる。それらは多くの人々の潜在的な能力を導き出し、高めることになるはずだ。同時に、IT以外の人間力の基礎となるべき分野に対して、より力を入れていくことが出来るのではないか。例えば、芸術や科学、語学などを研究・習得していくことにもっと力を振り分けていくことが出来れば、まさに人間としての価値を高めていくことにつながるはずだ。遠隔講義やグリッドコンピューティングシステムなど、人々が知識を蓄えていくための支援ツールは、これからも続々と登場するはずだ。格差社会を乗り越えていくヒントもこの中にあると考える。それは既存の政策には今まであまり見えてこない部分である「教育」である。一人一人が持つ潜在的な能力を最大限に高めていくことこそが、日本が格差社会や人口減少化社会を越えていく新しい道になるのではないだろうか。ITは人の中にあるアイデアを導き出し、昇華させるための道具である。最後に、提案したこの二つが実現した後、人間が創り上げる価値とはどのようなものなのか考えてみたい。

情報が均質化し、「道具」の扱いにも差が生まれぬ。このようになった場合、共通の中から抜け出す「脱・画一化」が起こるはずである。既にブログなどは、「人と違う」ことを発信するという表れだと思う。「違うことを考える」ことがこれからの、もちろん今までの価値創造の源だ。そして、ユビキタスネット時代はあらゆる単位での結合(連帯)が可能になるはずだ。例えば、個人＝個人や企業＝企業といった既存の関係の強化はもちろん、個人＝企業、果ては個人＝国、個人＝世界という結びつきが無制限通りに生まれていくはずだ。現在はまだ各コミュニティがバラバラなつながりのままである。これからはネットで大きな広がりを持つ日本の新たな「公共空間」

が形成され、緩やかだが連帯の意識を強く持てるようになるのではないだろうか。

個人の価値創造をマイクロなレベルで終わらせずに、集約し、最終的には理論にまで洗練させていくことが出来る世界になる。そこで蓄積されたものは、またITを通じて世界中の人々の共通知識として還元される。『情報の

リサイクル』現象とでもいうべきか。

ユビキタスネット時代には、「ユビキタス」の逆である「今だけ、ここだけ、あなたとだけ、それとだけ」が重要とされるはずである。わくわくするような無限のアイデアに出会える時代を見てみたい。

